

# アメリカ文学

日本  
アメリカ文学会  
東京支部  
会報

平成三十年六月三十日発行(年一回発行)通巻第79号  
アメリカ文学 第79号 平成三十年六月三十日 発行(年一回発行) 通巻第79号

日本アメリカ文学会東京支部会報

- 〈特集〉『ポカホンタスの400年——環大西洋文学史を再考する』
- アメリカ文学会東京支部会12月シンポジウム ポカホンタスの400年  
——環大西洋文学史を再考する ..... 下河辺美知子 ..... 1
  - 囚われたのは誰か——19世紀白人女性作家とポカホンタスの姉妹たち  
..... 大串尚代 ..... 2
  - 現代先住民作家ポーラ・ガン・アレンのポカホンタス ..... 余田真也 ..... 12
  - ポカホンタス・ナラティヴにおける語りの欲望  
——ジョン・スミスの出立 ..... 下河辺美知子 ..... 21
  - ポカホンタスとイギリス近代 ..... 原田範行 ..... 31
  - 環大陸的アメリカ文学史のために——コメントリーに代えて  
..... 異 孝之 ..... 39
- 〈投稿論文〉
- 「美しい敵」としての友——エマソン「友情」における対話と  
「距離の詩学」 ..... 富塙亮平 ..... 48
  - “But I Never Knew You Anyway”——SNS時代のFrank O'Hara  
..... 来馬哲平 ..... 56
  - “You Still Haven't Finished with Your Mother”——Allen Ginsbergの  
“Kaddish”における離散・忘却・邂逅 ..... 宮本 文 ..... 68
  - 日本アメリカ文学会東京支部の事務についてのご案内 ..... 76
  - 編集後記 ..... 87

# 「美しい敵」としての友

——エマソン「友情」における対話と「距離の詩学」

富塚亮平

ラルフ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson) にとって、言うまでもなく名高い「自己信頼 ("self-reliance")」の概念はきわめて重要である。この思想は、しばしば自己中心的と誤って解釈されるように、一見すると友人やパートナーを必要としない自己に自足した主体を想定しているように思われる。しかし、自己信頼の主体といえども、もちろん他者とのコミュニケーションから完全に隔絶してしまうわけではない。それどころかむしろ、ジョージ・ケイテブ (George Kateb) が正しく指摘しているように、「ただ友情のみが、社会と孤独な近代的主体の相互性を確立するものなのであり、社会と孤独は、友人がそうであるように互いのために存在する」(101) のだ。自己信頼の主体を築く前提に、友人やパートナーとの対話、交流が必須であったこと。この認識を踏まえれば、エマソンが講義「愛情」("The Heart") を原型とする 1841 年に出版された『エッセイ第一集』(Essays: First Series) 所収のエッセイ「友情」("Friendship") で具体的に展開した友愛論が、彼の自己観を捉える上でも重要な位置を占めることは明らかである。本稿は、彼の議論を主に「距離」と「対話」の主題の元で検討した上で、通俗的なエマソン像とは異なる変化し続ける自己のモデルを、言語との関係から提示する。まず着目するのは、どういった対象とどのような出会い方で友愛関係が結ばれるのかという問い合わせである。

まずエマソンはエッセイ「友情」冒頭で、対象との出会いの瞬間を、他人同士の街頭でのすれ違い (CW2: 113)<sup>1</sup>、あるいは自宅への他者の訪問として描き出している。こうした出会いは、どんな相手が現れるかわからない点で、「友情」と対をなす同じく講義「愛情」を原型とするエッセイ「愛」("Love") で言及される「名状しがたい魅力 ("the nameless charm")」(CW2: 104) とともに、すでに気心の知れた仲間の来訪とは異なる不安、ある震えをもたらす。「徳と自尊がとどまるあらゆる家で、見知らぬ訪問者の来訪がもたらす心の震えを考えてみよ。世評の高い訪問者が来ると告げられると、歎びと痛みの間で生じる不安が、家の者たちの心に襲いかかる」(CW2: 113)。この他者に出会った自己の不安や震え ("palpitation") は、近年ブランカ・アーシッチ (Branka Arsić) や堀内正規が強調している通り、変化の可能性に対して開かれた、エマソンの特徴として考えられるがちな強固な自己観とは相反する、受動的で柔軟な自己観を示す概念である。すでに相手について持っている印象を元に、自己の理想を対象に投影するような、アリストテレス的な友愛のモデルとは全く逆に、エマソンの震える受動的な自己は、相手との関係性を自己に合わせるのではなく、関係性にあわせて自己を調整する方向を取る。その時他者との出会いは、自己像の変容を強いるからこそ、自己に不安や恐怖を引き起こすような衝撃を与えるものとなる。彼は別の箇所でこうした出会いの性質を「新たな人間は私にとっ

てたいへんな出来事である」(CW2: 115)とも表現している。

ここで重要なのは、これら「震え」や「恐怖」といった表現が、いずれも身体や情動といった要素に関わることだろう。「才能 ("genius")」にこそ友愛関係の基盤を置くスタンリー・カヴェル (Stanley Cavell) らの議論と異なり、アーシッチは、エマソンの受動的で柔軟な自己観があくまでも彼の身体性に立脚したものであることを強調している (Arsić 193)。本稿もまた彼女同様、エマソン自身の身体性こそを、彼の友愛論の立脚点として解釈する。そもそも、「友情」は、エマソンが実際にマーガレット・フラーなど、自らの友人達と具体的に育んだ関係性をもとに、その経験に促される形で友愛について理論的に考察したテクストである。あらかじめ知的に構築したモデルに現実の経験を当てはめるのではなく、あくまでも自己が「震え」を覚えた経験を自らの身体で受け止め、そこに強烈な情動が喚起されたという実感をもとに、事後的に言葉を与えていくこと。それはすなわち、思考と感情の分離に抗い、感情によって駆動された思考を追求することである。講義「愛情」における「対話は友情の最初の事務所である」(EL2: 292) という記述にもあるように、出会いを経た二人はその後、対話を通じてその関係性を深めていく。徳の友愛を有用性や快楽のそれに対して優先する点においてはアリストテレスの伝統的モデルを引き継いでいた<sup>2</sup> エマソンは、二人が対話を通して相互に徳、真理と結びついた魅力を発見していく過程として理想的な関係性を捉えていたとまずは要約できる。しかし、こうした「知性 ("Intellect")」のみが関わるよう感じられる局面においても、常に出会いの瞬間と同様、恐怖や喜びといった強烈な「情動 ("Affection")」が忘れ去られてはならない。「最も気高い対話は、知性と情動の結婚のように思われる」ものであり、こうした対話が展開する時間こそが、「孤独な思索の時間からは区別される」(EL2: 292) ものとなるからである。

では、最も気高い対話とは具体的にどういったものなのか。多くの先行研究が、本エッセイにおける友情の構成要素をエマソンが「真理 ("truth")」と「優しさ ("tenderness")」の二つに大別している事実に注目し、あくまでも前者、真理の徹底的な追求という前提に立った上ではじめて、後者の領域への移行が起こると述べている。優れた友人の関係を助けとして、人は自己の外部にある真理へのアクセスを試みる。その際に鍵となる概念が、徳や真理の追求に専心する姿勢を指す「誠実さ ("sincerity")」である。真理を追究するためには、自分以外の誰か、つまり友人と誠実な関係を持つことが不可欠である。しかし、実際には友人とともにいることで、誠実さは常に失われる危険にさらされてしまう。「人は誰もが孤独であれば誠実である。二人目が入ってくると、偽善がはじまる」(CW2: 119)。この記述にはまさに、別の箇所でパラドクスとイコールで結ばれることになるエマソン的な友人の特徴が端的に表れている。この友人をめぐるダブルバインドを解決するために要請されるのが、友情の第二の構成要素である優しさである。ここでの優しさとは、真理を追究しつつもなかなかそれに辿り着けない、自らを含めた人間に対して向ける情動のことであると考えてよいだろう。デイヴィッド・ロビンソン (David Robinson) も指摘するように、「友情は、哲学のではなく、努力と情動の産物であり、哲学が失敗したのちの唯一の手段」(65) なのだ。

確かに、エマソンが理想としては優しさよりも真理により高い価値を置いていたことは間違いないだろう。しかし、他方で本稿の関心からより重要なのは、優しさから真理の領域への移行もまた起こりうるということ、その両者を往復し続ける運動の中にこそ、友人との「距離」をめぐるエマソン独自の詩学が息づいていることである。「友情」における

この真理と優しさの区別はおそらく、先に指摘した講義「愛情」における知性と情動の対立に対応している。だとすれば、優しさを真理に従属する要素として捉えるのではなく、「相互的な脱個人化」(Arsić 195)を行なうが、両者の往還を追求することこそが、知性と情動の結婚を実現し、エマソンにとっての「気高い対話」を成立させるために必要な道となる。エッセイ「愛」の記述にあるように、発話者が愛の対象の中に、「対象自身も知り得ない徳と結びついた美点」(CW2: 105)を発見することによって、聞き手が受動的に変化していく、そういった過程の連続こそが、エマソンにとっての理想的対話のモデルなのだ。では、この出来事としての対話は実際のところどんな条件の元で成立するのか。アーシッチはまず聞き手側の姿勢を問題視する。可能な限り自己防衛の境界を捨て、話し手に自己をさらすこと。そのような聞き手側の傾聴の姿勢を前提としてはじめて対話が出来事としての衝撃力を持ち得る。続いて、傾聴の姿勢を整えた聞き手にとって、親密な関係にある他者からの発話は、自己の変容を促すパフォーマティブな効果を持つ呼びかけとなる。この呼びかけへの応答責任を果たす事によって、受動性から出発した自己は、再び新たな形で自己像を能動的に形成し直す事が可能となるのだ (Arsić 212)。

このように、受動的な傾聴の姿勢を保って対話を繰り返す過程で、自己は不可避的に優れた友人／恋人に対する自らの至らなさに関する、引け目や不当さの感覚、堀内が日記や手紙を引用しつつ強調する「恥」や「凹み」の感覚といった様々な情動に襲われる。通俗的なエマソン観とは明らかに相反するこうした弱さ、受動性の感覚に身を浸してはじめて、自己は友人からの発話を呼びかけとして聴き取ることが可能となる。そして、その呼びかけへの応答を行う過程においてこそ、自己放棄を経由して再度自己信頼の感覚に達する可能性が生まれる。対話の只中にあって自らの至らなさに想いを致すこと、すなわち一度優しさを経由することによってのみ、はじめて真理へと近づくもう一つの道が立ち現れることとなるのだ。こういった理想的関係はしかし、現実にはなかなか実現せず、したとしても短く儂なものになる、というのがエマソンの現実的な認識であった。理想的な対話がもはや継続できない時、友情・愛情は終焉の時を迎、後には非人格的な淡い関係性だけが残る。「他者が彼の偏愛や定義づけ、欠点を対話に持ち込むや否や、全ては終わる。(中略) 彼は今や他者ではない。(中略) もはや、心の感動や魂の交際は存在しない」(CW2: 114)。他者が他者性を失ってしまったならば、そうした友との親密な交際には終止符が打たれねばならない。ではエマソンはなぜ、理想的対話の継続が困難であり、またそれが継続できないのであれば関係性を解消すべきである、と考えたのか。それは、理想的対話をを行う前提となる傾聴の姿勢を整えるには、一定の適切な距離を相手からとることが必要であり、そこにこそ最も大きな困難が存在するからである。

二者間の親密な関係性における心理的な「距離」の問題。講義「愛情」においてどんな親しい仲にも「無限の遠隔性」(EL2: 279)があることを主張したエマソンは、例えば日記の中で、「私は、些細なことで自分に近すぎるところまでやってくる場合には、妻や兄弟であっても彼らをたしなめ、叱りつける」(J7: 149)と書きつけるなど、自分の家族を相手にしてさえも一貫して、彼等を他者として迎え入れられるだけの距離を置くことを好んだ。これに関連して、アーシッチは愛情や友情を感じる側の立場から見たエマソンの距離の置き方に、「(友人を) 領有してはならない」(Arsić 193)を信条とする反領有、反所有のモチーフを見てとっている。エマソンはこう書いている。「われわれは友人を不可侵のまま留めおくのではなく、彼を領有しようとする偽の情熱を持って友を探そうとする。それは無駄である」(CW2: 117)。彼にとって親密な関係における所有欲は批判されるも

のであった。なぜなら、一方が他方に所有されるような距離の近すぎる関係性においては、互いに受動的に変化しあうような理想的な対話を構成することはできなくなるからである。つまり、愛される側としては所有されないために、また愛する側としては所有しないために一定の距離が必要とされるのだ。このことは、裏を返せば、こうした適切な距離が保てない時には、対象との関係性を放棄し、友人の元から去る必要があることを意味する。実際エマソンはその生涯で幾度となく自らすんで友人から距離を置き、遠ざかる身振りを見せてきた。それを指して薄情であると批判されることも多かったものの、彼は近すぎて煮詰まった関係性にとどまるよりも、一定の距離を置いた後でかつての関係性や友情を美しく想起し続けることを望ましいと考えていたのだ。こうした距離の感覚は、たとえば「友情」における「私たちは出会っていないかのように出会い、別れていないかのように別れようと思う」(CW2: 126)という記述に具体的に表現されている。

エマソンが「最も気高い」ものとした、この一定の距離を保ちつつ繰り返される、傾聴から応答、そしてまた傾聴へと連なる対話のサイクルは、決して単一の絶対的な真理に到達することなく、そのため必然的に多声的な側面を帯びることとなる。その意味で、エマソンの対話をめぐる議論は、ミハイル・バフチン (Mikhail Bakhtin) による対話理論を想起させる。しかし、決して絶対的な真理へと到達することができないのであれば、そもそも対話を通じた変化をエマソンはなぜ、そしていかにして肯定的に捉えることが出来たのだろうか。アーシッチも詳述していないこの疑問について、さらにもう一步踏み込んで考えるためには注目したいのは、エッセイ終盤における、友人を「たまに読み返す本」と並置する表現である。「私は友人たちに、自分の本についてそうするように接する。それらを発見できる場所では本=友人に触れるであろうが、それはまれである」(CW2: 126)。この比喩は、近づきすぎない距離の感覚について述べている点に加えて、本に書かれた言葉を、友人から差し向けられる会話における言葉と並置している点がさらに重要である。周知の通り、エマソンの友人たちとの交流において文通は極めて大きな割合を占めるものであった。この比喩は、手紙を熟読し、返事を書く過程、さらにはある種の本を読んで、それに触発されて日記やエッセイを書く過程もまた、現実の対話における傾聴から応答へ至る過程とパラレルなものとして捉え得ることを示している。つまり、その言葉が語られたものか、書かれたものであるかにかかわらず、エマソンにとって、何らかの応答責任を伴う呼びかけとして機能する言葉は、つねに知性や真理の領域のみならず、情動や愛情の領域においても、また単に精神のみならず身体的にも彼に変化をもたらすものであったと考えられるのだ。

そして、それらの言葉から受けた衝撃を、知性・情動両面において消化する過程で受動的に変化したエマソン的な自己は、統いてそこから新たな言語表現を作り出すことによってこそ、再度能動的に変化し、真理や自己信頼の感覚へと向かっていく。つまり、彼にとって友愛関係を通じた変化の価値は、さまざまなかたちをとる友人たちからの呼びかけをいかに聴き取り、そこにどのような「新たな言葉」で応答をなしたか、という言語表現のレベルに収斂するものとなるのだ。ここで再び本のアナロジーを持ち出すならば、この過程は「アメリカの学者」("American Scholar") における「創造的執筆があるように、創造的読書もまたある」(AE 79)との記述を思い起こさせる。すなわち、エマソンにおける対話とは、友人=本というテキストから、作者すら自覚していない魅力を創造的に読み込んだ上で、そこに自らの新たなテキストによって応答する過程でもあるのだ。さらにエマソンがその日記の大半を家族や親しい友人の閲覧を許す形で書き継いでいたことを

も考え合わせるなら、発話のみならず、彼の執筆行為がことごとく、何らかの他者への呼びかけ、対話的な語りの要素を含みこむものであったことが納得出来る。

そもそも「友情」は、友人であり家族であった最初の妻エレンや弟チャールズの死、そして執筆前後に交流を深めていた友人たちとの出会いから別離に至る流れと並行して書かれたテクストであり、したがって、出会いの衝撃や距離の感覚をめぐる記述は、現実の友いという記述は、フラーを通じて知り合った新たな友人サミュエル・ワードの印象を書き留めた日記から取られている。同様に、エマソンが行き着いた「距離の詩学」を象徴する次の比喩表現もまた、興味深い伝記的事実と関連する表現である。

彼を自分の片割れとして守れ。彼をあなたによって手なずけられず、熱烈に尊敬されるような存在、すぐに脱却され見捨てられてしまうような平凡で便利な存在ではない、永遠に一種の美しい敵（“beautiful enemy”）であるようにせよ。（CW2: 124）

「美しい敵としての友人」。このそれ自体美しい比喩にこそ、ここまで述べてきた彼の距離を巡る感覚が見事に凝縮されていると言える。しかし、実はこの表現はエッセイの当該箇所の原型となった1840年6月21日の日記の記述には見られないものだ。これにもっと近い表現は、同年9月29日に、フラーがエマソンに送った次の手紙からの一節にこそ見出される。「でもあなたは友の中に「敵」（“foe”）を求めたんじゃなかったの？」「恐るべき性質」を求めたんじゃなかったの？ でも私は未だ、あなたにとって美しい敵（“beautiful foe”）ではない。今後一度でもそうなることがある？ 私にはわからない」（Fuller 160）。当時フラーはエマソンに対して、それまでよりも深い関係性を求めていた。しかし、その要求に煮え切らない態度を取り続けたエマソンに向かってしびれを切らした彼女は、この手紙でエマソンに距離を置くことを告げる。それ以前にエマソンが口頭で彼女に伝えたとき、美しい敵（“beautiful foe”）のイメージを引きつっこでフラーは、私は未だあなたにとっての「美しい敵」ではない、と痛烈な批判を行っている。翌年元旦に印刷所へ回ることになる「友情」最終稿において展開された「距離の詩学」は、おそらく全体を通じてこのフラーからの挑発的な呼びかけに対する応答として解釈できる要素を持っているのだ。

デイヴィッド・ディクソン（David Dickson）は、バフチンの対話理論とエマソンのエッセイを比較した論文の中で、一方でバフチンによる日常会話と、想像力の余剰を含んだ理想的な対話を区別する議論にまず一定の評価を与えていた。しかし他方でバフチンが理想的な対話を通じて、日常会話では起こらないどのような変化が起こるかについて、具体的に記していない点を指摘し、その問題点を補足する形でエマソンを議論の俎上に載せている。バフチンが架橋できなかった知性と情動、真理と優しさの間にあらざる裂け目をエマソンがいかに繋いだのか。ディクソンは、ドナルド・ピーズ（Donald Pease）の議論を引きつつ、フィクションや語りの側面に注意を促している（Dickson 81）。創造的な語りを行うことで、「情動的な出来事は意義を持った経験へと姿を変え」（Pease 173）、その時葉での語りやテクストの執筆が、言葉の受け手のみならず、新たな言葉を創出した当人にセイ群は、ある意味で執筆行為を通じたトラウマ的な喪失、病的な状態からの回復という

構造を共有している。「友情」もまた、友人の喪失や関係の希薄化といった精神的に困難な状況をいかにポジティブに捉え直すか、と言う視点を含んでいる。こうした、執筆や語りをある種の情動調整の技法として捉える見方は、ある精神療法の方法論を想起させる。

先にあげたバフチンによる対話理論を基盤としてフィンランドで生まれた新たな家族療法である「オープンダイアローグ」は、統合失調症に対する画期的な治療法として、精神療法の現場で大きな話題を集めている。その手法は極めてシンプルなものだ。患者や家族から依頼を受けた責任者が少人数の治療チームを招集し、依頼後すぐに、チーム全員が参加する形でミーティングを行う。例えば精神分析における医者と患者の関係とは異なり、対話を誘導するリーダーや司会者をおかず、病院の閉鎖空間ではなく、慣れ親しんだ患者の自宅で全メンバーが互いに傾聴と応答を繰り返す中で、治療の問題が話し合われる。ケースが多数見られたことから、この手法は注目を集めるようになった。ヤーコ・セイッカラ（Jaakko Seikkula）らは、その共同論文で、オープンダイアローグの実践において「身体性」と情動が果たす役割の重要性を強調している。彼らによれば、「症状が身体化された経験であるように、（治療過程で生み出される）新しい言葉も、理性的な説明よりも身体化された経験から生み出される」（Seikkula and Trimble 472）。「症状」と「新しい言語」が並置されることとは、言語によって症状に変化を起こす可能性を含意する。彼は別々の共著論文では「これら新たな言語の中で、それまでは喚起された不安、あるいは経験のトラウマ的内容が原因で語りえなかった物語群が語られ得る。（中略）対話的なミーティングで緊張が緩和されたのち、患者たちの身体は症候を解消する方向に向けて機能し始めることが可能となる」（Seikkula and Arnkil 125-26）とも述べている。新たな言語を生み出し、それが物語、あるいは呼びかけとして誰かに届くことが語り手のポジティブな変化、症状の緩和を生む、というこの構図は、先にディクソンがバフチンの理論の問題点を補うものとして召喚したエマソンの語り、執筆の特徴と完全に重なるものだ<sup>3</sup>。「友情」本とともに示されている注目すべき比喩が存在する。

友人のこだまとなるよりは、友のそばで一本の刺草（“a nettle”）である方がよい。（中略）一人になることができるより前に、そこにはまさに二人がいなくてはならない。恐るべき性質を持った二人が互いに見つめ合い、恐れあわなければならない。（CW2: 124）

まずこの箇所は、もともと親友ラ・ボエシとの関係について書いたモンテーニュの記述を下敷きとしたものであり、モンテーニュに対するある種の応答であると言える。そこでとりわけ注目したいのが、元の記述には含まれていない「新たな言語」、“nettle”という表現である。ここでの“nettle”とはセイヨウイラクサを指すと考えられる。この品種は弱い毒を含んだ棘を持つ一年草の一種で、同時に全草を薬用で利用することが可能で、実際に薬用ハーブとして幅広く使用されている。刺草が持つこの毒でありかつ薬でもある、という性質には、先に見た「美しい敵」との共振が感じられる。また、ここで刺草が友の側、近くにあることにも注意を払わねばならない。友の側に寄り添いつつ、なお心理的に適切な距離感を導入するためにこそ、毒かつ薬である両義性が求められるのである。

さらに言えば、この刺草の特徴はジャック・デリダが『散種』に所収の「プラトンのパ

ルケマイア」において分析したパルマコンの性質とも符合する。デリダは、エマソン自身も愛読したプラトンの作品群において、ソクラテスが行う対話を通じて頻繁に現れるギリシャ語パルマコンが、治療薬という意味と毒という意味を併せ持つ多義語であり、プラトンのテクストにおいてこの語がつねにその多義性を考慮しつつ使用されていることを様々な例に則して指摘した上で、パルマコンの比喩に、ある単一のロゴスに絡めとられ、所有されてしまうことのない差異の差延としての両義性を見出している(Derrida 127)。同様にエマソン自身もまた、「代表的人間」(Representative Men)におけるプラトンを扱った章で彼の用いた比喩を引きつつ、対話においてソクラテスが持つ毒のような特性を「このソクラテスのシビレエイがプラトンを魅惑した」(CW4: 41)と、シビレエイの比喩を用いて説明している。

対象と自己を共に変容させずにはおかしい、毒であり薬でもある言葉を交わし続けること。そうした対話の過程においてのみ、エマソンが理想とした友愛の関係、すなわち理性と情動の結合が実現する。それ自体が対話的な成立起源を持つ「新しい言語」で綴られたエマソンの友愛論における両義的な比喩は、決して単なる言葉遊びや曖昧さを示すものではない。それらは、しばしば失敗しながらも、友人たちからの呼びかけを真摯に聞き取り、それに応答する中で自らもまた変容しようとしたエマソンによる試行錯誤の試みであり、われわれ未来の読者、友人を魅惑する呼びかけでもあったのだ。

#### [注]

本論文の元となる原稿は、2016年11月12日、日本アメリカ文学会東京支部2016年11月例会（近代散文部門）において、生駒久美先生司会の元で発表された。発表に際しては、近代散文部門の世話人である生駒先生、高瀬祐子先生から貴重なご意見をいただいた。また、発表原稿作成にあたり、慶應義塾大学の巽孝之教授、大串尚代教授より有益な助言をいただいた。記して感謝する。

- 1 引用部の省略について、以後 *Annotated Emerson* は AE, *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson* は CW, *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson* は EL, *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson* は J, とそれぞれ表記する。また、巻数については算用数字を用いて表記する。
- 2 アリストテレス以降の西洋における友愛論の伝統とエマソンの議論の関連についてはビュエル (Lawrence Buell) を参照。
- 3 関連して古屋は、エマソンのテクストと幸福の関係を同時代の医学的言説との関係から跡づける中で、彼のテクストの構造を「病は気から、健康も気から、そして気は言葉から」(94) と要約している。

#### 引用文献

- Arsić, Branka. *On Leaving: A Reading in Emerson*. Harvard UP, 2010.
- Buell, Lawrence. "Transcendental Friendship: An Oxymoron?" Lysaker and Rossi, pp. 17-32.
- Cavell, Stanley. *Emerson's Transcendental Etudes*. Stanford UP, 2003.
- Derrida, Jacques. *Dissemination*, translated by Barbara Johnson. U of Chicago P, 1981.
- Dickson, David. "Chronotopic Innovation: The Dialogic Constitution of Experience in Bakhtin and Ralph Waldo Emerson." *Dialogism: An International Journal of Bakhtin Studies*, vol. 5/6, 2000-2001, pp. 65-83.
- Emerson, Ralph Waldo. *The Annotated Emerson*, edited by David Mikics, Harvard UP, 2012.
- . *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*, edited by Alfred R. Ferguson et al., Harvard UP, 1971-2013, 10 vols.
- . *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson*, edited by Stephen E. Whicher, Robert E. Spiller, and Wallace E. Williams, Harvard UP, 1961, 3 vols.
- . *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*, edited by William H. Gilman et al., Harvard UP, 1960-82, 16 vols.
- Fuller, Margaret. *The Letters of Margaret Fuller Volume II 1839-41*, edited by Robert N. Hudspeth, Cornell UP, 1983.
- Kateb, George. *Emerson and Self-Reliance: New Edition*. Rowan and Littlefield, 2002.
- Lysaker, John T., and William Rossi, editors. *Emerson and Thoreau: Figures of Friendship*. Indiana UP, 2010.
- Pease, Donald. *Visionary Compacts: American Renaissance Writings in Cultural Context*. U of Wisconsin P, 1987.
- Robinson, David M. "In the Golden Hour of Friendship: Transcendentalism and Utopian Desire." Lysaker and Rossi, pp. 53-70.
- Seikkula, Jaakko, and Tom Erik Arnkil. *Dialogical Meetings in Social Networks*. Karnac Books, 2006.
- Seikkula, Jaakko, and David Trimble. "Healing Elements of Therapeutic Conversation: Dialogue as an Embodiment of Love." *Family Process*, vol. 44, no. 4, 2005, pp. 461-75.

- 古屋耕平「エマソンの幸福論——自然と偶然について」『身体と情動——アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』竹内勝徳・高橋勤編, 彩流社, 2016年, 79-101頁。
- 堀内正規「君の友を君自身から守れ」——エッセイ「友情」と震える主体』『エマソン——自己から世界へ』南雲堂, 2017年, 153-79頁。